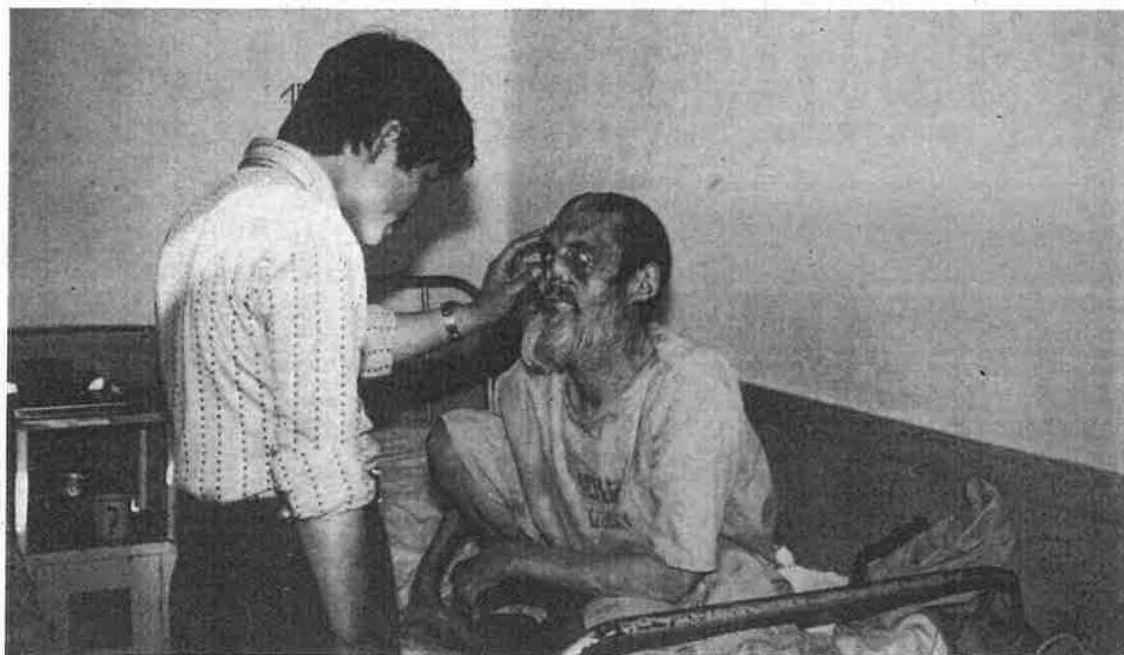


ペシャワール会報

No. 4

～アジアで共に生きる～



ハンセン氏病棟にて診察する中村哲先生

ペシャワール通信(2)、(3) 中村 哲 (2) ペシャワール・ミッション病院の活動 (5)
「祈りの手紙」より中村哲先生原稿引用 (6) 中村哲先生帰国報告会のお知らせ (7)
会員からのお便り (8)

ペシャワール通信(2)

中村 哲

会員のみなさんお元気でしょうか。

五月末にこちらに来てから、はや四ヶ月がすぎました。この間六、七月はバクスタンの国語のウルドゥ語を学んでいましたが、八月は急性肝炎で休んでいました。自分が病気になるとは情けない話ですが、それでもおかげで九月初旬には元気をとりもどし、現在少しずつ診療に携わっています。

具体的には院内にある四〇床前後のらい病棟をうけもち、一部の外来患者の診療を行っています。

語学校に通っている時期、自由な時間を利用して難民キャンプや辺境の事情をみてまわりました。その結果思ったことは、私がかえりかえして述べてきたように、私たちはまだまだ本当にはこれらの同胞の苦痛をよく知らないでいるし、私たちの繁栄がこの苦痛の上に成り立っているという事実が理解できていないということでした。(このペシャワール会の機関誌の副題は、「アジアで共に生きる」となっています。これは、当初考えられた「アジアと共に生きる」というのでは、いかにも脱亜入欧をかかげてアジアと分離してきた私たち自身の立場がわれ知らず現われている



ペシャワール難民キャンプ

のではないか、という批判が一部にあった為、わざわざ「と」を「で」に変えたものです。ふだんは余りごさかしい字句の修正や、理屈が嫌いなペシャワール会の代表者たちがこの修正をうけられたのは、大切な意味があったからです。「いかに微力であっても、夫々のできる範囲で力を尽して、同じアジアの同胞の苦痛も喜びもわかちあおうではないか。」という願いがこめられているのです。

「共に生きる」というのはそうなまやさしいことではありませぬ。家庭のある人なら、すれちがいからくる夫婦喧嘩の回数を数える気もしないでしょうし、職場で他人と働く場合はなおさらです。まして遠いアジアの人々のこととなると、どうしても身近かには思えないのです。しかし、だからと言ってひらきなおり、他人の不幸も当然のように考えることほど不親切で不人情なことはありません。越え難い溝がおかれているのは事実としても、それを何とか埋めたい、何とか同胞として重荷を負い合い、喜びも分かちたい、という

群をなしてやってくる難民たちや、社会的偏見の重圧下で生きているらい患者たちを診ていると、まだまだ私たちの力というよりも努力が足りないような気さえしてきます。怪我を治してもらって喜んでジハード(聖戦)に帰ってゆくアフガン人の背中を複雑な気持ちで見送ったり、次々に下痢で死んでゆく乳児たちと母親の悲しみにもらい泣きしたりすることもあります。「病氣」として現れる人間の不幸が、わが同胞たちの不幸の全体のごく一部にすぎないというのが私の実感です。

(もちろん、暗いことばかりではありません。北西辺境州のパターン人の率直さ、純朴さ、誠実さも、私にとっては分かちあいたいことの一つで



パキスタン フンザ シシパル氷河にて

す。

これから、先ず病院での一般診療の質をさらに高め、その上で、地元の人々を励まして移動診療の組織化を図り、次第に活動範囲を拡大してゆく積りです。これには、忙しい日本では想像のできぬくらいの年月と試行錯誤が重ねられることでしょうか。しかし、私はみなさんの代表のつもりです。すから、あわてずに着実に、この地に人と人との心の通った交流を築いてゆくつもりでおります。それにはやはり、現実問題として物量（医薬品、

器具、ジープなどが大きいにこしたことはありませんが、ものがただのものではなく、「アジアで共に生き」よつとする私たちの心の結晶となることを心から願っています。

仕事は緒に付いたばかりですが、どうぞこれからも今までと同様、変らぬ大きな御協力をお願いいたします。

一九八四年九月

ペシャワールにて

中村 哲

ペシャワール通信(3)

もろもろの山と丘とは義によって民に平和を与えよう。

彼は民の貧しい者の訴えを弁護し、乏しい者に救いを与え、しえたげる者を打ち砕くように。

彼の世は義に栄え、平和は月のなくなるまで豊かであるように。(詩篇第72篇)

首都イスラマバードから西方に走るハイウェイをバスでゆくと、約二時間でアトックという小さな町に着く。いかめしい城門のような検問所をくぐり長い架橋を渡ると、パターン人（パシュトゥーン）の国、北西辺境州に入る。ペシャワールまではここからもうすぐである。



ペシャワールの市街地

遠くヒンズークツシユの峰々の白雪は氷河となって山をけずり、溶け出す水は北辺チトラルを潤してアフガニスタンに下る。さらにジャララバードでカブール川に合流して国境を越え、ここアトックでインダス川に注ぎこむ。茶褐色の荒寥たる岩石沙漠を深くえぐり、無数の渦を巻いて悠々と流れる鉛色の巨大な濁流は、もう何万年も変わらず、ここを通過してインド平原に入る多くの征服者たちを見送ってきたことであろう。

澄き透るような空の青さ、インダスの濁流の鉛

色、褐色の荒々しい岩肌——もうすっかりおなじみになったこの光景も、今年はずか重苦しく感ぜられ、川の流れが重く黒ずんでみえた。上流のジャララバードでは現在でもソ連軍とアフガン・ゲリラの激戦が続いているが、今春の米ソ会談が決裂して内乱の泥沼化が必至となった上に、八月の米国による武器援助48億ドルの決定で、戦鬪の近代化による大規模な殺戮が予想されるからである。これまでのように、各地に割拠するゲリラと各地方の政府軍との取引で非爆撃地区がとり決められたら、ラマザン（断食月）の休戦などという「牧歌的な戦争」ではなくなった。文字通り村ぐるみを殲滅する残虐なものになるにちがいない。

現在アフガニスタン難民は推定三〇〇万人で、うち二〇〇万人以上がペシャワールを中心とする北西辺境州に居住している。戦鬪が激しくなればなるほど、難民が爆発的に増加するのは間違いない。ただでさえ貧困なパキスタンには、これら招かざる同胞たちの受け入れは多大の負担であり、同時に政治的な爆薬庫となる危険な要素もはらんでいる。それがこの先際限もなく増加するとすれば……。まだ残暑が厳しいというのに、寒々とした気持で、故郷を捨てて乞食のように流れてくる難民たちのことを考えずにはおれなかった。

一方、ペシャワールは、おそらくこの町始まって以来の活況を呈している。難民の流入は巨額の

外国援助をもたらし、カブール——ペシャワールの密貿易をさらに増加させた。「パシネトウンの女王」といわれるこの町は、中央アジア最大の内陸貿易・消費都市として、現在未曾有の繁栄下にある。アフガニスタンから密輸されてくるものは、またしてもメイド・イン・ジャパンであふれている。日本製の服地と電気製品は、麻薬と並ぶ最大の取引商品となっている。

自給自足生活から突如として現金生活のまっただ中に放りこまれた難民たちが、この商品の海の中で、その本来の純朴さを溺死させるのにその時間はかかるまい。加えて、生活手段をもたず、いわばお貰いの国際援助で食べている彼らがこの先どうなつてゆくか、考えるだけでも暗い気持ちにならざるを得ない。

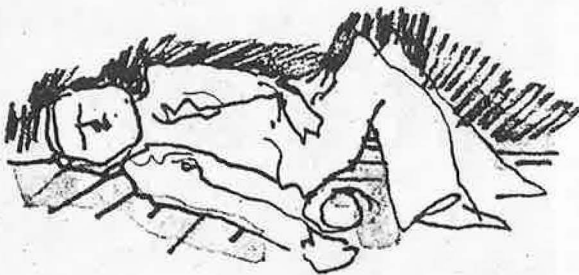
戦争と難民、バザールの活況と日本製品の氾濫、政治と宗教対立のはざままで苦しむ人々、消費生活に蝕まれてゆく人々の心——ここには単純にはわり切れぬ発展途上国の苦悩の構図が、入り乱れて集約されている。

ともあれ、ここアトックでこの悠久のインダスの流れに見入っていると、ペシャワールのにぎわいも日本の繁栄も、どことなくインチキで空虚なものに思えるのだった。この流れの中に、上流のアフガニスタンからどれだけ多くの同胞たちの血と涙が溶けこんでいるのだろうか。そして、これらの人々の犠牲の上に成り立っている繁栄とは

何なのだろう。

今日も変らぬ鉛色の濁流は、物言わぬ一つの啓示である。今、この時代の変わりめで、われわれは何をすることを求められているのだろうか。遠い自分の国・日本を複雑な気持ちで思い浮かべずにはおれなかった。

一九八四年十月



ペシャワール・ミッション病院によるチトラル無料診療

ペシャワール・ミッション病院、ウジャガー院長は眼科医ですが、辺地診察についても大変熱心です。今夏も7月、ペシャワール北方にあるヒンズークシュ山脈のふもとチトラルで、病院のスタッフによる眼科と内科の無料診療が行われました。その時の活動報告が送られてきました。なお、中村医師は、この時マリーの語学校でウルドゥ語の研修中で、この診療には参加していません。



① 診療のオープニング・セレモニー



② 白内障患者に手術前の検査を行うウジャガー院長

「祈りの手紙」より

20号、21号より引用 (JOCS 発行)

お元気ですか。当地の暑さもやっと峠を越え、しのぎ易い天気が多くなってきました。それでもモンスーンの影響で湿気が多く、快適とは言えません。

今月は余りかんばしくない不名誉な報告です。8月初旬より急性肝炎にかかり、黄色くなって寝ています。8月10日にペシャワールに出かけ、余りきついので路上に坐りこんでいるところへ、偶然わが院長のウジャガー先生が通りかかり、さすがに眼科医、いきなり私の眼をみるなり「肝炎ですな。」

それで肝機能検査で確診したのち、厳に入院を命ぜられました。入院を拒否してラワルピンディに戻り、食事その他で自由のきくゆきつけのホテルで寝ていました。幸い、多くの旧知がかけつけて、あれやこれやと世話をやいてくださり、食欲も出てきてずいぶん元気になりました。こちらの人は過度と思えるほど親切ですが、夫々が自信をもって自分の「黄疸」の治療法を主張し、気の弱い私は断わるのも悪い気がしてあれやこれや押しつけられるままに試してみました。さとうきびのジュース、大根の汁、みかんの皮、果物、ぶどう糖の溶解液……等々。

おかげで、どれが効いたのかか解らないけれど、ともかく回復してきました。

しかし、面会者が日に日に増え、中にはフンザやペシャワールからも来訪する人たちもおり、安静どころではなくなってきたところ、日本大使館の親切な申し出で救われ、大使の公邸にしばらく避難することにしました。しばらくは、何よりも完全な健康の回復が最も重要だと考えられたからです。(ちなみに前日の来訪者は、英国ミッション・グループ3名、アフガン人3名、フンザ人3名、日本人4名、パキスタン人5名、フランス人1名と猫1匹となっております。絶対安静どころではありません。)それで今は、冷房のきいた部屋で、ぬくぬくと日本食をいただき、一日中寝ころんで、何か普通の人々に悪いような生活を送っております。

語学校は中途退学、ビザの件は棚上げ、ともかく一時完全休戦です。しかし、病気をしてみると本当に人々の情けが身にしみてわかります。みしらぬ土地で、多くの人々が無条件に好意をもって支えてくれる、そのことが大変嬉しく感ぜられます。肝炎と一緒にかえがたい友情も確認できたのですから、私としては本望です。

9月からはいよいよペシャワールへ移ります。これからの働きのためにどうぞお祈り下さい。(中村 哲)

聖名を讃美します。

お元気でしょうか。先に電報でお知らせしましたように9月23日付(観光ビザの切れる日)を以て、長期ビザが取得でき、滞在に関する問題はなくなりました。要するに、スペシャル・ケースとして、半永久的にこちらに居ることができるというビザです。8月中旬までは、実は、ウジャガー氏も日本大使館も充分、自信がなかったのですが、その後、各方面の協力を得て、ようやく取得にこぎつけました。私が病気になって(肝炎)大使館にころがりこんだのも幸いしましたが、これに投入された多くの方々の御努力は、決して小さくありません。とくに大変な労をとってくださったウジャガー先生と在パキスタン日本大使、及び山村書記官には感謝しております。

これからの当面の見通しと予定について報告します。

- ① 当面、これまで通り、らい病棟の管理、内科男性患者の院内診療を続け、良い人間関係を築く。
- ② 移動診療は来年4月頃までに形を作り、それまでにはスラム地区の定期訪問を実施する。
- ③ その後に活動範囲を拡大し、いずれは保健衛生面で活動するワーカーの出現を期待したいと思います。

そこで、11月下旬から12月初めには一たん帰国して態勢をととのえたいと思っています。

先日の事故では、大使館の方が私の病気を心配して手伝いはしませんでした。おかげで日本から来た医師団から沢山、薬品を貰って大助かりでした。

最近「シルク・ロード・ブーム」で日本人のツーリストが増えてきました。しかし、時間などネタはずれに無視されているこの国で欧米人や日本人がスケジュールのぎっしりつまった日程を組むこと自体、無理なのです。今度の事故も、すり切れたタイヤのせいにするのはまちがいで、バック旅行方式を強行しようとした旅行社の側にも責任の一端があると私は思っています。数年前まではパンクやジープの故障は日常茶飯事でしたが、それでも意外に大きな事故は珍らしかったものです。自然を無視したスピード化が生んだ悲劇と言えると思います。

院内の診療(内科)が今のところ私の主な仕事です。しかし、改善すべき点が多く、移動診療のベースとして使えるだけの診療能力をつけておくべきだと思ひ、しばらく主力をここに注ぎます。(中村 哲)

中村哲先生帰国報告会のご案内

中村哲先生は、この12月1日に一時帰国されます。JOCS やペシャワール会との諸打ち合わせ、ご家族の赴任等のためですが、先生は既にペシャワール・ミッションホスピタルで診療活動にはいっておられます。先生の現地での働きとペシャワール会としての今後の支援内容についていろいろとご報告もごさいますので、会員の方々には是非ご出席頂きますようご案内申し上げます。

- ◎と き 1984年12月9日(日)午後2時～5時
- ◎と ころ 九州キリスト教会館4階ホールにて(福岡YWCAの隣)
福岡市中央区舞鶴2丁目7-7 Tel

◎主なプログラム

- 1、ペシャワール会の活動報告
- 2、中村哲先生報告
- 3、その他



会員の皆様から

◆故・玉井政雄さんのご遺族より指定寄附

ペシャワール会の発足にあたりご尽力頂きました玉井先生は10月8日にご昇天されましたが、ご遺族よりペシャワール会に多額のご寄附を頂きました。

◆ロータリークラブでも支援拡大

若松中央クラブの井上さん等を中心に、各クラブで中村先生支援の輪が更に広がっています。クラブ例会等で必要でしたら事務局員を派遣しますのでお申し出下さい。

◆YMCA祭でペシャワール会の活動展示

11月11日に行われました第6回YMCA祭は延800人の方々が参加され盛会でしたが、この中のアジアコーナーに中村哲先生のペシャワールでの活動の模様を展示しました。又、YMCA祭の益金の一部がペシャワール会へ寄附されました。

◆会員の皆様へお願い

会員名簿の整理、会費納入の確認等、事務局では、全力を尽していますがいろいろとご迷惑をかけている点もございます。特に今年度すでに会費を納入して頂いた方にも会報3号を郵送の際振替用紙を同封しまして、ご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。なお現在の会員数は約一、七〇〇名です。

会 則

- ①本会の名称をペシャワール会とする。
- ②本会は、JOCOSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③本会は、派遣母体であるJOCOSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤会員は一口年額一〇〇〇円以上の会費を納入する。ただし三口以上の人は同時にJOCOSの会員になることができる。
- ⑥本会は会誌の発行を行ない、会員は会の拡大に努める。
- ⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨本会の事務局を福岡YMCA
(千八一〇 福岡市中央区大名一―二―八
七八一―七四一〇)内におく。